

由来と伝来の関わり、源頼朝に至るまでの日本の歴史を語る物語で、鎌倉時代末期から南北朝期の成立かと言われています。『平家物語』や『太平記』と組み合わせたかたちで享受されていきました。ここでは、その『剣巻』から、源頼光のころに世間を騒がせていた鬼の正体が生きながら鬼になった女で、宇治の橋姫だと述べている部分と、さらに源家の名剣「髭切」を用いてその鬼と渡り合った渡辺綱(源頼光の従者)の活躍を描いた部分を挙げました。この巻が鬼になった女のことを書くのは、もちろん、誰もが恐れたその鬼と渡り合った頼光の従者、綱の剛胆さと「髭切」の威力のすごさを示すためなのですから、ここで注目したいのは、この鬼になった女がなぜ「宇治の橋姫」と言われたのかです。

そもそもこの女は、なぜ生きながら鬼になったのでしょうか。それは、嫉妬に狂ったゆえです。では、なぜ嫉妬に狂ったのでしょうか。それは、自分の思う男が他の女に心を奪われ、自分のもとに来なくなつたからです。来ぬ男を待つ女―そのイメージを代表するのは「宇治の橋姫」です。しかも「宇治の橋姫」と言えば、平安時代末期の歌字書に、行方不明の男を捜すふたりの妻がいて、もとの妻を大事にする男に対し、新しい妻が嫉妬のあまりつかみかかろうとする、という話も書かれていました。待てども来ぬ男を待つ女、男に裏切られ嫉妬する女……。ここで鬼になった女の姿は、「宇治の橋姫」詠が内包する要素が解釈の過程で肥大化したものと言えるでしょう。

では、このなかで具体的に語られる、生きながら鬼になる方法やその姿というのは、いったいどこから取り込まれたイメージなのでしょう。実は、中世に書かれた『古今集』の注釈書のなかに、そのもと

となつたと思われる話があるのです。

4 鬼の形象

勅撰集の最初として尊重された『古今集』は、平安時代後期ころから、その解釈の困難な語や歌、序に対し、多くの歌人や学者によって注釈がつけられ、書物に書かれるようになります。その背景には、当時の末法思想を背景に、ことからの始原や原義、正しいものを知ろうとする意識が高まったことが挙げられます。中世になると和歌の家や流派の対立もあって、注釈行為はますます盛行し、伝承などを交えた、現代の私たちから見ると一見荒唐無稽な説が語られる注釈も多くあらわれます。③に挙げた『古今集為家抄』は、藤原定家の子息である為家が弘長三年(一一六三)に宗尊親王に進覧したという伝承を持つ注釈書ですが、実際はもつと後代の二条家流に連なる某が種々の説をとりまとめたものとされています。この注釈書が「宇治の橋姫」詠に付した説に、嫉妬によって夫に捨てられた女が鬼になって夫と女を取り殺したいと誓いを立て、宇治河に百晩髪を浸して水神に祈つて鬼になつて望みを叶え、やがて橋姫として祀られたとあります。

中世に書かれた古典作品の注釈は、能などの作品に大きな影響を与えており、おそらくこうした注釈が「剣巻」の鬼の形象、あるいは謡曲「鉄輪」の、嫉妬の余り鬼になった女の形象に影響しているのでしょう。鬼になるために髪を五つに固め、顔に朱を塗るなどの行為は、呪術行為と関係していると考えられています。『閑居友』に、やはり夫に捨てられ恨んで鬼となった女が、髪を飴で五つに固めたり紅の袴を着たりしている様子が書かれており、それも参考になるでしょう(→参考資料4)。

参考資料

〈西行と江口の君〉

1 『新古今和歌集』巻十・羈旅・九七八、九七九

天王寺にまうで侍りけるに、にはかに雨のふりければ、江口に宿を借りけるに、貸し侍らざりければよみ侍りける

西行法師

世の中をいとふまでこそ難からめかりの宿りをも惜しむ君かな

(九七八)

返し

遊女妙

世をいとふ人とし聞けば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ(九七九)

本文『新古今和歌集』上 角川ソフィア文庫、久保田淳訳注(二〇〇七、角川学芸出版)

【通釈】

天王寺に詣りましたときに、急に雨が降つたので、江口に宿を借りようとしたところ、貸さなかつたので詠みました歌

西行法師

この世を厭い捨てることまでは難しいかもしれませんが、かりそめの旅の宿を私がお借りすることまでも、惜しみなさるあなたなのです。かりそめのこの世に執着するのと同じように…。

返し

遊女妙

世を厭って出家なさつた方だとうかがつたので、俗世そのままの私の宿など、心を留めなさいませぬ、かりそめの現世に執着なさらぬようにと思つばかりです。

2 『撰集抄』巻九第八話「江口遊女事」

過ぬる長月廿日あまりの比、江口といふ所を過侍しに、家は南北の河岸にさしはさみ、心は旅人のゆききの船を思ふ遊女の有様、いと哀にはかなきものかなと見たてりし程に、冬をまちえぬ村時雨のさえくらし侍しかば、けしかる賤が伏屋に立より、晴れ間まつまの宿をかり侍りしに、あるじの遊女ゆるす気色の見え侍らざりしかば、なにとなく、

世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりををしむ君かなと読み侍しかば、あるじの遊女うちわらひて、

家をいづる人としきけばかりの宿に心とむなとおもふばかりぞと返して、いそぎ内に入れ侍りき。ただ時雨の程のしばしの宿とせんとこそ思ひ侍しに、この歌の面白さに、一夜の臥しどし侍りき。

このあるじの遊女は、今は四十余りにや成りぬらん、みめことがらさもあてにやさしく侍りき。夜もすがら、何となく事ども語りし中に、この遊女のいふやう、「いとけなかりしより、かかる遊女と成り侍りて、年比その振舞をし侍れども、いとびんなく覚えて侍り。女は